

### 「お祭りイベント？」

春の甲子園の話題だが、山梨学園高と対戦した東北高は、初回、先頭の選手が相手遊撃手の敵失(エラー)で出塁。その際にヌートバー外野手がWBCで披露した話題のペッパーミル・パフォーマンスを行ったところ、イニング終了後に一塁塁審から注意を受けたという。その審判の行為に疑問視する人もいれば、高野連の持論に賛同する人もいる。相手の敵失への行為と捉えるならやり過ぎた感が強いという意見に同感だ。しかし、高校野球の甲子園大会は本当に教育の一環なのかどうか、その問題に切り込まない限り、そのパフォーマンスが無礼なのかどうかだけの議論に収まってしまいうだろう。

今から40年以上も前、日教組は小学校での運動会を体育授業の一環であると主張し、授業は平日に実施するものであるという根拠に基づき、日教組の影響を強く受けた学校現場では、運動会の開催が土日から平日に変わったことがある。土日開催の運動会には、地元地域の人も集まり、子どもはお弁当を観客席の保護者と食べ、その後ろにはたこ焼きなどの出店が並んでいた。まさに地域のお祭りとしての運動会イベントでもあった。

しかし、平日開催になると共働きの保護者参加も少なく、昼食は教室での子どもだけの給食であった。万国旗が運動場に数多くたなびいてはいたが、実に寂しいイベントとなり、競技種目から運動会独特の騎馬戦なども姿を消しつつあった。学校でのイベントは常に教育の一環でないといけない感が蔓延し、運動会＝お祭りの等式に組合員が反対し、競争をも否定し徒競走で手をつないでゴールするという奇妙な光景も登場した。

今では、保護者や地域の要望を受け、土日開催がまた復活している。

地域住民が一体となって地元の小学校の運動会を盛り上げることを否定する根拠が教育の論理の中にあるのか。高校球児が目指す甲子園は教育の延長線上にあるのだろうか？

運動会はおじいちゃんやおばさんを交えた地域住民を、甲子園大会は野球ファンもふくむ全国民を巻き込んでの盛大なお祭りのイベントでいいと思うがどうだろうか？

(丹羽 豊)